

# あかしん

わが町、わが店、この道一筋。出逢いとコミュニケーション あかい新聞店ホームページ <http://www.akai-shinbunten.net> <発行所>あかい新聞店 武豊店/知多郡武豊町字金下37番地 ☎<0569>72-0356 常滑店/常滑市市場町4丁目167番地 ☎<0569>35-2861

総合印刷物企画・プランニング・デザイン・印刷・加工・オンデマンドデジタル印刷・デジタルメディア企画制作



半田中央印刷株式会社

〒475-0032 半田市潮干町1番地の21  
TEL <0569> 29-2525 (代) FAX <0569> 29-4500  
E-mail: main@handa-cp.co.jp <http://www.handa-cp.co.jp>

企画・制作：株式会社 新聞ビル

## 元氣のでてくる“ことばたち”

174



撮影・鶴崎 然

### 村上信夫

父は声楽家、母は歌謡曲の先生。幼いころから、家の中には、イタリア歌曲か歌謡曲のいずれかが流れていた。いつも音楽があったのだ。この両親のもとに生まれていなければ、今日はない。

藤澤さんの音楽に向けて生えた。2002年、北海道から上京して、武蔵野音楽大学へ進んだ。大学卒業後、ソロアーティストとしてデビューを目指し、曲作りとライブ活動を繰り返したが、デビューまでの道のりが長かった。オーディションを受けまくったが、どこから見向きされなかった。

のべ100社を超えた頃、いまの事務所のオーディションを受けた。たまたまクラシックの発声で、オペラも入れたデモテープを持っていた。社長が聞いて「両方いいじゃないか！まだ誰もやっていない面白い」と反応してくれた。どちらかに決めなくてもデビュー出来ると安心した。どちらも完璧に、というのは無理だ。「新しいジャンルに挑戦したい」「オンラインワン」を目指そうと思った。

2008年4月、『ダッタン人の踊り』でデビューした。ロシアの作曲家ボロディンのオペラ作品『イーゴリ公』の中の曲「驢車人の踊り」をサビに引用し、新たなメロディーを新たに作りオリジナルの歌詞を付けたもので、ポップオペラの原型が出来上がった。その後も、ハートマン・アルビーニ、マスカーニ、ドビュシーの曲を藤澤流にアレンジして、どんなファンを増やして、コンサート会場は、いつも満席だ。

### 父の道と母の道、両方やればいいんだ

〜ポップオペラ歌手 藤澤ノリマサさん〜

藤澤ノリマサさんは「ポップオペラの貴公子」と呼ばれている。ポップオペラは、曲のサビの部分に有名なクラシック音楽を入れ、サビ以外は新たに作曲したポップスメロディーになっている。サビの部分はイタリアオペラの発声法で歌って、それ以外はポップスの発声法で歌うので、ポップス好きな方にもクラシック好きな方にも楽しんでもらえる新しいジャンルだ。

ラジオリタミンの「ノリノリクラシック」は本当におもしろかった。藤澤さんのノリの良さでクラシック音楽をわかりやすく解説してもらおうと企画したら、大人気のコーナーになった。彼が出演する日はお便りがたくさん来て、リスナー拡大に役かつてくれた。「毎回パッパさんとか、ベートーベンさんとか親しみを込めながら、一人の作曲家に焦点を当てて解説しましたが、正直、音大時代よりよく勉強しました」と藤澤さんは苦笑する。

の道が拓かれたのは、小学校時代だ。1年生の時、テレビで歌手を見て、「自分も歌手になりたい」と思うようになった。3年生で、母が、勝手に応募した夏祭りのカラオケ大会で優勝し、以来人前で歌を唄うことが好きになった。5年生で、国語の教材になった詩に曲をつけた。それが、学校の記念行事の曲に採用された。全校生徒1000人が歌ってくれて、音楽の計り知れない力を感じた。

高校1年で、カナダに語学留学する。盲目の音楽の先生がピアノの弾き語り、セリーヌ・ディオンの「レット・トーク・アバウト・ラブ」を弾いてくれた。体中に電撃が走った。涙があふれた。

その翌年、そのセリーヌ・ディオンの来日した。札幌から東京ドームまで聞きに行った。イタリアのオペラ歌手、アンドレア・ボッチェリとデュエットしていた。イタリア語と英語で歌うのを聞いて、僕一人だけ出来たらいいのと思った。このとき、父の道か、母の道かと思っていたが、両方やればいいという思いが芽

ポップオペラは、こうして生まれた。1983年、北海道札幌市生まれ。30歳になったばかりだ。北海道に生まれたことが大きい。「広大な大地、澄み渡る空、深い藍をたたえた海。ボクの曲作りの原風景だと言う。空と海と大地に抱かれた音楽作りがノリマサ流。狭い空間で締め切りに追われるのは流儀に合わない。

その翌年、そのセリーヌ・ディオンの来日した。札幌から東京ドームまで聞きに行った。イタリアのオペラ歌手、アンドレア・ボッチェリとデュエットしていた。イタリア語と英語で歌うのを聞いて、僕一人だけ出来たらいいのと思った。このとき、父の道か、母の道かと思っていたが、両方やればいいという思いが芽



俳画/イネ・セイミ

ぼくは、耳のことを聞いて、初日のコンサートを迎えるまでは、気がかりで気がかりでしかなかった。その日は客席でドキドキしながら見ていた。まさしく父親の心境そのものだった。だから、第一声を聴いたときは「ああ大丈夫だ」と胸をなでおろした。

「僕も楽屋で村上さんの顔を見たときは胸が詰まってしまった。ただ、あの苦しみを乗り越えたことで何か大きなものをつかんだような気がするんです」「自分にとってはこれが精いっぱいだと聞き直して臨んだ結果、かえっていい出来になったような気がします」  
辛い思いはしたが、結果的によかった部分もあったようだ。会場には、いろいろな悩みを抱えている人たちがいる。彼が病氣と闘っている姿やがんばっているところを見て励まされた人もいたはずだ。

実は、突発性難聴を発症したとわかったのは、藤澤さんと雑誌の対談をする日だった。当日の朝彼からキャンセルの申し入れがあった。心配して駆けつけたコンサート会場で、彼はケロッとしていて、いささか拍子抜けしたのだが、後日談を聞いて、顔で笑ってなんとやら。彼の成長の糧になった事態であったことはもとより、深刻でもない彼にも、感心したのだった。

**好評発売中**

「嬉しいことばの種まき」

フルト奏者として活躍中。俳画家。絵画を幼少より日展画家の（故）川村行雄氏に師事。俳画を華道彩生会家元（故）村松一平氏に師事。俳画の描法をもとに、少女、猫等を独自のやさしいタッチで描いている。個展多数。

**俳画教室開講中**

常滑屋  
とき 月二回 第二・第四金曜日  
午後一時～三時  
会費 一回 二、二五〇円（三月分前納制）  
問合せ ☎〇五六九三三〇四七〇

**インディアンフルト教室**  
開講しました。  
詳しくは個人レッスン  
入会受付中!!

何か始めたいと  
思っている貴女へ、  
数年後、素敵に  
フルトを奏でる姿が  
そこにあります。  
楽しく個人レッスン  
致します。

講師 **イネ・セイミ**  
（フルト奏者 指導歴30年）  
1レッスン・1時間5,000円（チャイム付）  
申込み ☎0569-89-7127  
お問合せ [seimine@oasis.ocn.ne.jp](mailto:seimine@oasis.ocn.ne.jp)



新シリーズ ヒューマンライフ

『新・現代家庭考』 就職

—自分ドラマつくろう— (24) 岡田 清治

不倫
陽介に抱かれた時は、何もかも忘れ魂が燃え尽きるほどだった。だから妊娠してもおかしくはなかった。それを知ったのが陽介の滑落事故の後だった。恵美は生まれてくる子は陽介が遺してくれた形見だと出産して自分で育てようという決意をした。

その頃、声をかけてくれたのが、同じゼミの京都出身の山根(旧姓木村)幸子だった。
「つらいだろうが、元気に生きてこそ、彼も喜ぶと思うよ。どう、次の休日、私の実家に行かない。京都を案内するわよ。美しい庭や神社仏閣、それに仏さまを見れば癒されるよ。そうしよう」

こうして恵美は幸子と親しく付き合うようになった。卒業後、幸子の結婚式に招待され、その縁で前島を紹介され結婚したのである。
ただ、恵美は妊娠したが流産だったことだけは幸子にも話さなかった。

「今後、妊娠しにくくなる可能性は残りますが、まずは元気に回復されてよかったです」

産婦人科の医師は恵美に話した。
このことは封印したまま前島と結婚することになった。それはある種の世間体だった。両親や友人から「結婚しないの」とことあるごとに言われることが「結婚して一人前であることを見せてやる」と意地のような感情が堆積されていた。前島に抱かれていた時、どうしても陽介の顔が浮かび燃えられない。そのことを前島も感じたのか、途中でセックスを止めてしまうこともあった。

恵美は妊娠して前島の子どもが生まれてくることに耐えられなくなっていた。このため避妊薬を常用するようになった。

恵美はともかく仕事に熱中することであらゆる邪念が取り除かれると信じ、別々の人生を歩む人間が同じ屋根の下で暮らす仮面夫婦を演じるようになってしまった。

前島は恵美に「なぜ、子どもが生まれないのだ」と直截的に聞かないが、そのことで悩んでいることはわかっていた。このままこの結婚生活を続けていたらどうなるかと不安がよぎる。離婚した方が幸せになるという自信が恵美にはなかった。このため仮面夫婦を装いながら結婚生活を続けている。

前島は恵美の学生時代のことには知らないことはもとより、避妊薬を飲んでいることなど夢想もできなかった。そして天野を抱いて本当のセックスのすばらしさに目覚めた。

前島は午後の八時前に横浜のホテルに着いた。
「前島さま、伝言が届いています」

「そうですか」
「本日、急用のため行けなくなりました。恵美」と書かれていた。

前島はホテルの部屋に入って伝言をもう一度、読みなおした。体が凍るようになってしばらく動けない。

「どうして、恵美なのだ。天野のいたずらではないのか。ホテルに恵美の名前で予約していることを知っていたのか。ではないか。それにしてもなぜ、携帯にかけないのか。前島はようやく落ちていくカバンの中をまさぐった。携帯がない」と、再び驚愕した。そういうえば、宿泊するためカ

バンを替えたことを思い出した。
「家に忘れた携帯で恵美は天野のことを知ったのか。それでホテルに伝言を頼んだのか。それにしてもこのホテルは天野しか知らないはずだが…」

前島は一人で泊まることを決め、シャワーを浴びてホテルのバーに出かけた。
天野の携帯番号は自分の携帯がない限りわからない。今

頃、本社営業部にいないだろう。家に電話して恵美に確認すればすべてわかるかも知れないとウイスキーの酔いが回ってくる、あれやこれやと浮かんでくる。

やがて恵美がすべてを知ったとしたら、恵美はどうするだろう。そうならば前島自身に落ち度があったのだから、慰謝料を要求することも考えられる。リストラが近いことも感じて割増退職金が出るだろうと、高額な要求を突きつけてくるかもしれない。

「人生の破滅だ」と心の内で叫んだ。
やがて天野との不倫がばれて懲戒免職になれば、退職金どころではない。天野は前島が独身だと思っているに違いない。結婚していることがわかれば、社内で漏らすだろう。そうならば女子社員のネットワークで社内中に流され、あぐくのはては不倫がばれる。不倫だけでなく個人の問題だが、OJTで指導している新入社員と社用でホテルに宿泊したことがわかれば、役員会に報告され懲戒免職になる可能性もある。

前島は浴びるようにウイスキーを飲んだので、ホテルの部屋にほうほうの体で戻ってそのままベッドの上で寝てしまった。
翌日、頭の中がもうろうとしていた。朝食もとらずに家路へと向かった。

かつばで話を聞いていたママと善真三は前島がだんだんと元気をなくしながら苦しうに話すのを見ていたが、「それでどうなったの。結末を知りたいの」とママは食い下がった。
「も一本、もらえますか」
「いいわよ。ひと思ってください」
真三は気の毒だと思いつつながら実弟の離婚のことと重ね合わせていた。

「離婚というものは不経済ですね」と、真三は前島に聞いた。
「一般にはそうですね。とくに子どもがいたら大変でしょうね」
「結局、不倫がばれて退職されたの」
「違います」

前島は酔いが回り心地よくなったのか、その後のことを話し始めた。
「前日は朝の八時ごろ着いた。
「ただいま。今日は仕事に行かないの」
「土曜日で会社は休みです。まだ酔っているの」
「ああそうか。熱いお茶をくれないか」
「はい」
恵美はいやによそよそしい。
「ところで、昨日、横浜のホテルに伝言したのは恵美、お前か」
「…」
「どうして横浜のホテルに泊まることになったのだ」
「帰宅したら留守テルに天野という方から伝言が入っていたので、聞いてしまったの」
「なんてことだ」
「あなたも聞けば」



ゴーギャン博物館の庭(夕ヒ子) 著者撮影

※この物語に対する読者の方々のコメント、体験談を左記のFAXかメールでお寄せください。今回は「就職」日本のゆくえ「結婚」「夫婦」についてです。物語が進行する中で織り込むことを試み、一緒に考えます。
FAX: 0569-34-7971
メール: takamitsu@akai-shinbun.net



プロフィール
著者：岡田清治おかせいじ
一九四二年生まれ ジャーナリスト
(編集)ロダクション・NET108代表
著書に『高野山開創二百年 いっぱいさん行状記』『心の遺言』『あなたは社員の全能を引き出せますか』『リヨンで見た虹』など多数

「いいよ。どういう内容だ」
「今夜、横浜での約束行けなくなった」と、まるで恋人のような甘い声で入っていたと話した。
「それで」
「それで、最近の宿泊はいつも金曜日だと思いついて、バックをクリーニングに出すとき、ポケットにあった横浜のホテルの領収書を取って置いたことを思い出しました。ひよっとしたら昨日も同じホテルかも知れないと、天野さんの伝言を伝えるためにホテルに宿泊の有無を確認しました」

「それで」
「ホテルの人が前島ご夫妻で予約が入っていますと言ったから、天野ではなく私の名前を伝言したのです」
「それで」
「やはり天野という女性が気になりました。会社に聞くわけにもいかず、幸子さんから山根さんに聞いてみたらわかるかも知れないと思っただけです」

「山根は何と」
「しばらくしてご主人の方から電話があり、天野さんは前島さんの下でOJTの指導を受けていた方で、最近本社営業部に異動になりました」と教えて下さいました。それで天野さんがどうかされましたかと聞かれましたので、自宅の留守テルに急ぎの用件で電話がありましたので、ひよっとしたら会社の方かも知れないと、山根さんならご存知かと思っただけです」

「それなら俺の携帯にしてくれたら…。そうか、携帯を家に忘れていたのだ」
「何回、かけても出ないものだから…」
「こうなったら、隠しても仕方ない」
前島は天野とのいきさつを白状した。

「山根の言う通り、この前まで部下だった。それでそのうち彼女と親しく付き合っている。できたら一緒にいたいと思っただけ」
「…」
「つまり恵美とは離婚したい」
「離婚ですか」
「そうだ。このまま天野さんとの関係を続けるわけにはいかないだろう」

「天野さんは私たちのことを知っているのですか」
恵美はすでに腹を固めていたので落ちついて話した。
「わからないが、独身だと思っただけ」
「しばらく考えさせてください」
「いいだろう。恵美は怒らないのか」
「怒っても仕方がないでしょう」
「ということは、今回の件は水に流してくれるのか」
「そんなことはありません」

「では、どうするのか」
「だから考える時間をほしいのです」
「もちろん、考えてほしいが…」
「…」

「昨晩から寝ていないので、もう一度寝るよ」
「どうぞ」
前島はすべて話したことで気持ちが落ち着いた。急に睡魔に襲われたので急いでベッドに潜り込んで眠った。

# 船頭『重吉』漂流記

江戸時代に、西尾市佐久島で生まれ海の男として知られる船頭重吉の話をしてしまおう。

重吉は、本名を小栗重吉といい、十五歳の時、養子先の半田市で、船乗りになります。

一八一三年（文化十年）二十九歳の頃、江戸へ、米やしょう油、味噌などを運搬した帰り遠州灘付近で、暴風雨のため遭難。この時から漂流が始まります。積み荷の大豆などで、食いつなぎ、漂流四八四日目にサンフランシスコ付近で「英国船フォレスト号」に助けられます。十四人乗っていた船員は、助けられた時、三人しか生きていませんでした。

## 今、なぜ重吉か

西尾市佐久島生まれの船頭重吉は、江戸時代世界最長の漂流をした男です。私達は、宇宙の中の地球号に乗っています。一人一人が環境問題を考えて協力し合う時代です。

船頭重吉が、「いかに生きたか」を考



船頭重吉漂流略図



佐久島の風景



海の男船頭重吉誕生の地

えることは「私達は、いかに生きるべきか」に、繋がるのです。時代は変わっても人間が、どのように判断し、どのように行動したかが、問われる時代です。

## 二〇一三年は、漂流二〇〇年目なんです

西尾市、半田市、新城市との縁。一八一三年十一月に漂流して、今年で漂流二〇〇年目になるのです。この機会に、佐久島内弁天サロンを借りて「重吉サミット」を開催しようと思います。

平成二五年十一月十六日（土）重吉サミット前夜祭。懇談会と「重吉物語」の紙芝居と、佐久島の民話を語る行事です。夜民宿に泊まる人は、懇親会も盛大に行



船長日記原本（ふなおさにつきげんぼん）

います。

平成二五年十一月十七日（日）は、

西尾市

（佐久島での誕生の地）

半田市

（十五歳以後の育生地。千石船の出発は、知多半島からです）

新城市

（船長日記、原本発見の地です）

三市の交流を開こうと思います。三市の人が集まれば、重吉も喜んでいと思っています。紙芝居の実演（原画は、西尾市の中根正治先生）も行います。又「佐久島の民話を語る」企画もあります。

十一月十七日には、中日海洋少年団の皆さんが、名鉄観光船に乗って佐久島見学に来ます。ドラマチック、弁天島歴史探検ツアーも開催します。将来希望のある少年達に、佐久島をもっともっと知っていただこうと思っています。

## 地元で開催する意義

船頭重吉の生まれた東の港に立ちました。自宅の前は、すぐ海です。大島や弁

財天の祀つてある筒島も見えます。篠島も、日間賀島もすぐ近くです。

夏の太陽の下で、重吉が、友達と泳いでいる姿が浮びます。魚釣りもしています。島の中を、真っ黒になって走り廻っています。

一色の大提灯祭りも、船に乗って観てきたと思います。「三ツ子の魂百まで」と言うけれど、この佐久島の風土が、重吉にとって、人間形成に重要な意義を持つていてることを感じます。

## 重吉は、帰国してから死んだ十二人の為に供養碑を建てます —名古屋熱田区成福寺にあります—

佐久島は、小さな島なのに、古い神社や寺が、たくさんあります。重吉の自宅の裏には、正念寺、阿弥陀寺、八剣神社。南には弁財天などです。重吉の心に信仰心が、産れないはずはありません。帰国してから尾張藩から水主として迎えられたのに、それを返上し、辞退し、死んだ十二人の為に供養碑を建てたのです。この強い信仰心は、この島の風土から生れたことを肌で強烈に感じました。さあ、佐久島に遊びに来て下さい。



供養碑

（注）1. 一色学びの館にて、西尾本まつりに合わせて、「小栗重吉展」を一ヶ月ほど開催。（10月12日～11月30日）  
（注）2. 弁天サロン内ギャラリーにて、行事と合わせて、重吉物語紙芝居原画展開催。（11月9日～12月10日）

千石船漂流二〇〇年目  
海の男船頭重吉の会会長  
水野 克 宣  
連絡先 090-4219-8758

## 千石船 漂流200年目

『海の男 船頭重吉』  
（キャプテン重吉）の会  
趣意書

ふるさととは、子どもや孫への贈り物です。  
まちづくりは、その土地を舞台にした、お芝居作りだと思います。  
この会は、以下のことを行動目標に、まちづくりに取り組みたいと発会致しました。

- ① 一色えびせんべい「重吉せんべい」の製作・配布、できれば販売。
- ② 船頭「重吉」の紙芝居を作成し、市内保育園・小学校・学びの館等で読み聞かせ。
- ③ 東日本大震災被災地の一日も早い復興を願って「幸せの黄色い旗プロジェクト」（吉浜人形主催）に協賛する。
- ④ 勉強会・企画展示会等を通して、船頭「重吉」を広く知ってもらうよう努める。
- ⑤ 船頭「重吉」の彫刻像を佐久島内に作る。
- ⑥ 音楽を含めたミュージカル・オペラなどの文化活動を推進する。
- ⑦ 世界最長と言われる重吉の漂流484日をギネスに申請する。
- ⑧ 西尾市一色町（重吉誕生の地）、半田市（15歳からの住地）、新城市（船長「ふなおさ」日記の原本発見の地）3市のチームワーク、絆をつくることにより、千石船漂流200年祭（2013年）記念行事を催行したい。
- ⑨ その他

まちづくりは「足元の材料を文化化すること」をモットーに賛助会員を広く募り、「共に人生を楽しく過ごしましょう」と呼びかけるものがあります。

発起人  
水野克宣 090-4219-8758  
中根正治 090-9264-6111  
三矢 誠 090-7434-0403  
本郷昭代 080-3061-8789



